

大学教育の新たな可能性を求めて

——キャンパス・エデュケーションと

フィールド・エデュケーションとの連携——

西田 邦昭

「どうしておにいさんは私たちのところへ来てくれはるんですか。同情ですか？ それとも哀れみですか？」

大学2年生の頃にボランティア活動でしばしば訪れた大阪にある養護施設の子どもからもらった手紙に書いてあった言葉です。どのような返事を書いたか今はもう覚えていませんが、何日も何日も「何故自分は訪れるのだろうか」と自問自答したことを今でもはっきりと覚えています。1960年代の高度成長時代の「陰」の部分として生み出された多くの家庭崩壊の子どもたちが入園していました。一人の子どもを通して社会の縮図が見えてくるようでした。

大学4年生の時には、韓国の学生たちとの合同ワークキャンプに参加しました。次の言葉はその時韓国の学生が私に語った言葉です。

「わたしの祖父と祖母は日本の軍隊に殺されました。わたしは今でも日本人を憎んでいます。でも、私たち若い世代が新しい歴史を作らなければいけないと考えてこのキャンプに参加しました。」

それまでほとんど日本と韓国との歴

史を知らなかった自分にとっては大きなショックでした。自分の今ある生が過去とのつながりの中であることを教えられました。

そして1974年4月、立教大学卒業と同時にそのまま立教大学の職員として勤めはじめました。初めの3年間は総長室広報課に勤務し、4年目から去年の3月まで18年間学生部で勤務しました。学生部では学生の課外活動への援助業務と、立教大学の学生部の特色である課外教育プログラムを中心的な業務として担当していました。自分が学生時代体験できたような機会を学生たちに提供できればと願い、積極的に企画・運営に携わってきました。

「課外教育プログラム」、何だかわかるようなわからないような言葉です。課外教育とは正しくは正課外教育ですが、正課教育に対して正課外の教育ということでしょう。ある時、学部の先生から、教育権限の無い学生部が教育と名の付く活動を行うのはおかしいのではないかと詰問されたことがあります。戦後の大学改革の中で、「人間形成」の一環として学生の自主的な活動

に教育的な意義があることは広く認められているところです。またそのための援助活動として学部以外に事務局がプログラムを展開することも大学の教育活動の一環として認められているところです。

立教大学では、学生部とチャブレン室が主として課外教育プログラムを展開しています。かつては地方から出てきた学生のための夕食会や歌舞伎や能などの教養講座が中心でしたが、近年は一年間ひとつのテーマで様々なプログラムを展開するセミナーや特定のフィールドを訪ねるキャンプが中心となってきました。現在展開されているキャンプは下表のとおりです。

5つのキャンプで年間100名近い学生が参加しています。キャンプへの学生の参加動機は大きくは以下の3つに分けられます。

- (1) 自分自身を変えるキッカケとしたい。
- (2) 自分たちとは異なる環境で生活している人々と出会いたい。
- (3) 自分の将来の進路を考えるキッカケとしたい。

多くの学生たちが、中学、高校と厳しい受験競争の中で「自分とは何者なのか」「どう生きていきたいのか」など思春期に本来十分時間をかけて悩むべき課題を棚上げにしています。大学に無事入学した彼らは、ようやく勝ち取った4年間の中でいろいろな機会を通じてそうした作業をやり直しているようです。その一つの機会としてキャンプに参加してくる学生が多いようです。

それぞれのキャンプのプログラム自体にそれほどの違いはありません。私が参加したキャンプを例に挙げると、沖縄キャンプでは、日中は園で生活する人々のお宅を訪ねお話しを聞いたり、一緒に料理を作ったり、ゲートボールをしたりします。そして夜は参加者全員でミーティングを行い各々が感じていることを語りあいます。毎日そうした作業を繰り返し、愛楽園での出会いを自分の中で深めていきます。

また、高島町でのキャンプでは、日中は各農家で働き、夜は農家の人のお話しを聞いたり、いも煮会をしたり、

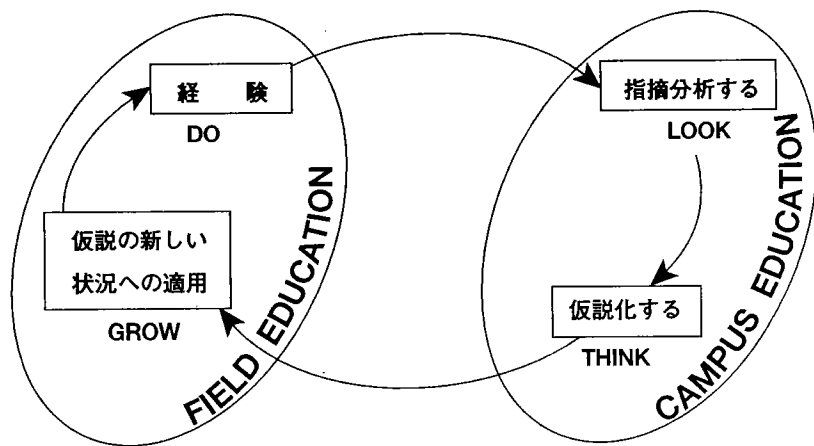
名称	主催	キャンプ地	時期	募集人数
奥中山ワーク・キャンプ	チャブレン室	岩手県 社会福祉法人カナンの園「小さき群れの里」	夏休み	20名
フィリピン・キャンプ	チャブレン室	フィリピン ルソン島北部マウンテンプロビンス州	夏休み	40名
沖縄キャンプ	チャブレン室	沖縄県 国立ハンセン氏病療養所「愛楽園」	春休み	15名
榛名キャンプ	チャブレン室	群馬県 特別養護老人ホーム「榛名憩いの園」	春休み	15名
夏季フィールドワーク[農業体験]	学 生 部	山形県 高島町上和田地区「上和田有機米生産組合」	夏休み	15名

参加者同士でのミーティングをしたりします。

沖縄のハンセン氏病の療養所と山形県の農村。まったく異なったフィールドです。しかし、実際に行ってみると非常に似ていることに気づかされます。それは、そこに生きている人々が非常に厳しい現実を引き受けながらもたくましくそれを変えていこうと前向きに生きているということです。フィリピンの山奥の人々や岩手の精神薄弱者の人々にも共通していることだろうと思います。ある人は病気や障害、偏見や差別に苦しみ、またある人は国の政策に翻弄され、またある人は貧困に苦しみ、それでもその現実には押しつぶされそうになりながらも必死に新しい状況を切り開こうとしている人々。厳しい現実と向き合いながらも優しさと笑みをたたえた人々。彼らとの出会いを通して「人間」と「社会」がほんの少し

かもしれませんが見えてきます。学生たちはそうした出会いを通して、「何か」をつかんでいるようです。自分がこれから生きていく上で非常に大事な「何か」としか言いようのないもの。ひっきりかのようなもの。やがて自分を養い育てる「核」になるようなものを持ちかえて来ています。大学の中で講義を聴くことも非常に大事ですし、そこからいろいろなことを得ていく学生たちも多くいるわけですが、一方でいろいろな知識なり情報を自分の中で整理していくという枠組みに関係してくるのはそういう出会いだと思えます。こうしたキャンプでの学びと大学での学びとの関係を、1983年度のチャプレン室の報告書では次のように位置づけています。

我々は「学習」を次のような循環過程を持つものとして位置づける。



現在の大学教育の状況を考えるとき、指摘分析しそして仮説化することの領域に比して、指摘分析し仮説化するための素材、すなわち経験の領域と、仮説に基づき新しい状況に適應していく場が希薄であると認める。

「生きた現実に参加し、そのニードに應えていくなかで生きた現実に学ぶ。そしてそこで得た経験をキャンパスの中に持ち込み、各自の専門領域の中で指摘分析し、仮説化を行ってゆく。その過程をもって新しい状況に臨む中でその仮説の新しい状況への適用を試みる」このような循環過程の中で「学習」という作業が十分になされていくのではないだろうか。我々は経験と仮説の新しい状況への適用のこの領域をFIELDと呼び、そしてこのような理念に基づいてなされるプログラムをFIELD EDUCATIONと呼ぶ。

我々は生きた現実の中で、生きた学びによる経験を求めると共に、現在の大学教育の手薄な部分をFIELD EDUCATIONをもって補っていくことを一つの役割と考えている。

大学設置基準の大綱化以来、各大学で大学改革が進められています。その中心に教養教育型でいくのか、専門教育型でいくのかとの議論があります。立教大学ではこうした議論はむしろ少なく、立教大学が伝統的に堅持してきた教養教育型すなわちリベラル・アーツ型でいくことが概ね了解されているようです。今日の日本の大学において

は、学部レベルで学部専門教育といってもリベラル・アーツの一形態と見なすことのほうが自然のように思われます。これからは学部の垣根を越えて学生たちが自分の関心に応じて自由に科目を選択していく時代になっていくことでしょう。「関心」この言葉がキーワードになっていくのではないのでしょうか。多くの学生たちは大学の授業の中で関心を呼び覚まされていくことでしょう。そのためにも、大学は積極的に学生の関心を呼び覚ますようなカリキュラムを開発し、授業を研究し、学生たちに提供していかなくてはならないのではないのでしょうか。

もう一方で学生の関心を呼び覚ます働きかけの一つとして、フィールド・エデュケーションにその可能性を求めることができると思います。幸いこの点では立教大学には長い伝統があります。キャンパス・エデュケーションとフィールド・エデュケーションとの連携。本来的には学生が自由に往来することが理想だと思います。しかし、現実的にはほんの少しの「動機づけ」が必要でしょう。すでに個々のレベルでは実践されている先生方もいらっしゃいます。学校社会教育講座ではカリキュラムの中に組み込んでいらっしゃいます。あまり大上段に構えずに、出来るところから始めればよいのではないのでしょうか。そうした働きが積み重なってきた時、そこに新しい大学教育の姿が見えてくるような気がします。

(教務部 職員)